

医師の義務と資格にかんする講義（承前）

(Lectures on the Duties and Qualifications of a
Physician (1770, 2nd 1772) ¹⁾)

ジョン・グレゴリー

(John Gregory)

(松家次朗訳)

第4講義

[[「自然」の探究において留意すべき一般的見解と原則]]

「自然」の作品は無限の広がりと無限の多様性を持っている。しかし、この多様性の全体の中に、私が既に述べたように、他の部分から完全に切り離して研究することでは、いかなる部分も完璧に理解されえないという密接な関係が存在する。「自然」の作品の種々様々な分枝への私たちの探究には、特に留意すべき研究のためのある種の一般的見解とある種の一般的原則とが存在する。「自然」の研究において留意すべき一般的な見解は、（１）それが個々人にもたらす利点（advantages）と、（２）公共の効用（public utility）に関するものである。

[[「自然」の研究に伴う利点、宗教に適する [[「自然」の探究]]]]

（１）「自然」の探究に伴う個々人に対する利点は、十分明らかである。こういった探究は、精神の能動的な力の多くを鍛錬し、好奇心、真理に対する愛、偉大なもの、美しいもの、驚嘆すべ

*2015年1月8日受理。

きものに対する愛を、すなわち、人間の本性の深くに埋め込まれた諸原理を満足させる。

(2) 公共の効用に関しては、それらは、優美で有用なあらゆる技術、人間の生活の幸福と光彩に資するあらゆる技術を推進する。「自然」に対する深い知識は、人々に自らの無知や誤り、すなわち、自らの能力の極めて限定された状態をより深く自覚させることによって、誇りとうぬぼれとを消滅させる。[そのような知識は] 宗教の利益にも適している。[というのも、そのような知識は、] 事物の本性における人間の知恵によってはたしかにしばしば探究できないが、しかし、それらの働きにおいて恒常的で一様な、かつまた驚くべき程に彼の被造物の幸福を推進するのに適した諸法則によって、諸々の事物のこのような驚嘆すべき枠組みを支えている「至高の存在 (Supreme Being)」の無限の知恵や力や慈悲についての最も人を驚嘆させる証拠を呈示するからである。そのような知識は、ほんの僅かの感受性を持った、あるいは変に歪められていないあらゆる心に、あの恐るべき畏怖の感情を、神威 (Divinity) に対するあの愛と感謝の念を、その神意に対するあの恭順の念を、そしてまたその善意に対するあの信頼の念を刻印するに違いない。[そして] こういった物のみが真の信仰を作るのである。ある人々によって、広範な知識は無神論に行き着くと想像されてきた。しかし、そのような疑念には何の根拠も存在しない。実際には、わずかな学問こそ、心の弱い、うぬぼれの強い人にとって危険なものなのである。そういう人は、二次的な原因に対する浅薄な知見から、「第一の偉大な原因」を見過ごしがちだからである。けれども、健全な知性にとって、広範な知識は謙虚さの真の師である。[そのような知識は] 人々がいかにしばしば二次的な原因に対する自らの偽の知見において欺かれるかを明らかにする。そしてまた、これらの原因の多くが明白につきとめられている所でさえ、それらを結びつける連鎖を追究する際には、最も明敏で最も透徹した天才すら、どこかで立ちどまらざるを得ず、最後にはそれらの原因を至高の知的な「第一動者」に帰属させざるを得ないのである。しかしながら、私たちは哲学から不敬の嫌疑を取り除こうとしているのだが、非常に重要な区別立てに留意しなければならない。私は敢えて、かの哲学者たちは宗教の最も堅固な支持者たちだったのだと主張しよう。彼らは自らの天才と不屈の努力を「自然」の作品の探究に使用し、そしてまた科学における彼らの見解は壮大で広範囲に及ぶものだった。この主張を証明するために私が持ち出すことのできるだろう多数の範例の中から、私たち自身の国の3人の名前のみを挙げておこう。

すなわち、ベーコン卿とボイル氏とアイザック・ニュートン卿である。² 他方で無神論の最も名高い普及者であったあの哲学者たちは、「自然」の作品にそれほど精通していたわけではなかったし、また、彼ら自身の矮小な精神において真理を探究したのであって、彼らの外にある壮大な世界の中に真理を探究したわけではなかった。^{*} [^{*}Bacon と注あり]³ [彼らは] 科学と有用な技術に関して言えば、そういったものを観察と実験によって推進する代わりに、完全に無視するか、あるいは、形而上学的な微細な区別によってそれらを駄目にしてしまった人々である。[そういう微細さは、] たしかに、しばしば才知に富み、かつもっともらしいものではあるが、決して有用な発見や改善に導くことはない。

「神の摂理」や魂の非物質性や実存の来世の状態の証拠を論破する目的で、こういう人々によって作り上げられ、ときに大いなる精妙さと多少の空想力によって支えられた、単に仮説的なものである諸原理の体系は、人間の精神の驚くべき歪みを示している。もし仮に私たちが「空想」の領域へ舞い上がることを選んだとすれば、それは間違いなく、心を楽しませ、癒し、来世(futurity)や、「摂理」や、人間本性の尊厳に関する[人を]喜ばせる見通しによって想像力を活気づけようとする欲求から出たもので、私たちの本性の品格を貶めることや、最も興味ある主題に疑いの念を浸透させることや、さらにまた、人類の共通の感情を持ったすべての心に暗い影を投じることを目的とするものではないであろう。

[人の自然誌とそれに含まれるもの]

自然的知識の分野の中で、人類に関係するものほど有用もしくは興味のある分野は存在しない。そしてそのことは、それに[以下のものが]含まれることを考慮すれば明らかである。

- (1) 医学、すなわち、健康を維持し、命を延ばし、病気を癒し、そしてまた、死を安らかなものにする技術。
- (2) 人間の身体のような能力、例えば、強さと敏捷さのような[能力]を改善する技術、私たちをして苦痛や寒さや飢えや、そしてまた人類がさらされる他の多くの悪に勝るものとする技術。
- (3) 美の保存と改善。

- (4) 精神と身体との合一の法則とそれらが互いに対して持つ相互的影響の法則。これは、人類の注意を常に引き付けてきた最も重要な探究の一つであり、道徳と医学の諸科学においてほとんど同等に必要なものである。後者には「次の物が」含まれる。
- (a) 外的及び内的な種々の感覚や、記憶や、想像力や、情動や、判断力の保存と改善の理論 (doctrine)。
 - (b) 想像者の精神と身体に対するだけでなく、他の人々の精神や身体に対する想像力の力と影響の記録 (history)。
 - (c) いくつかの種類の熱狂の記録。
 - (d) 妊娠に影響する両親における種々の条件 (circumstances) と彼らの子供たちの体質と性格の記録。
 - (e) 夢に対する力の私たちの獲得を目途とした様々な夢の記録。
 - (f) 慣習と習性の力と諸法則の記録。
 - (g) 感覚に対する印象の結果として、音楽や、精神と身体に作用するような他の事物の効果の記録。
 - (h) 観相学 (physiognomy) や外に現れた身振りの理論を包摂する、自然的符号と自然的言語の記録。
 - (i) 模倣の力と模倣の原理の諸法則の記録*。[*Baconと脚注あり]

私はこれらの項目を一つの見本としてのみ挙げているのであって、人類の自然誌の下に包摂される多くの重要な事項の完全な目録として挙げているのではない。私はそれらを「自然」についての私たちの探究において考察されるべき、そしてまた本質的に「医学」という学問と結びつけられるべき一般的な目的 (views) の事例として挙げているのだが、その道徳的、政治的、あるいは宗教的な能力において人間に関係する諸研究を私の職業に無関係なものとして無視しているわけではない。

[[「自然」のあらゆる事象は普遍的な法則の結果として生起する]

さて続けて、私は「自然」の探究において私たちの注意を必要とする一般的な諸原理を規定し、それらをより具体的に「医学」という学問に適用することにしよう。私たちの周りを眺めるとき、私たちは対象がある種の不変の秩序においてともに結びつけられ、ある規則的なつながりにおいて相互に継起していることに気付く。

[これらの法則はどのようにして確認されるのか]

まさに観察と経験によって、私たちは「自然」の作品におけるこのような確固とした秩序や規則的な継起を発見するに至る。いかなる物も偶然によっては生起しないことを私たちに納得せしめる、自然の本性によって可能とされる、すべての証拠を私たちは持っている。それどころか、あらゆる事象は確固とした不変の法則の結果として生起すること、そしてまた、類似の場合には⁴、同じ事象が一様に生起するだろうということを信じるあらゆる理由を私たちは持っている。

[人類における根源的な確信 (belief) の原理]

ここで私は、あらゆる推論や経験に先立って、人間の精神に植え込まれている根源的な原理が存在することを認めなければならない。その原理によってその精神は自然の進行が規則的であるという確信に導かれるのである。この原理の結果として、ある事象がもう一つの事象の後に続くことを子供が目にするときには常に、同一の条件においては同一の事象がその後に続くだろうという本能的な信念 (persuasion) を彼は持つ。この信念は、彼が原因と結果との間に見るいかなる結びつきから来るものでもなく、経験に由来するものでも、あるいはまたいかなる種類の推論に由来するものでもない。このように他の何かと結合した、私たちの観察の範囲内で生じるすべての物を、私たちはその原因もしくはきっかけとしてあまりにも強く見ようと欲するので、ややともすれば私たちはほんのわずかな理由に基づいて様々な結合を想像する。そしてこのような弱点は、「自然」において確立されている実際の結合についてほとんど何も知らない無学な人々に最も顕著である。同様に信じやすさ (credulity) は根源的で本能的な原理であるように思われる。それによって私たちは経験に先立って、自然的符号 (signs) からなる言語だけでなく、人工的

符号からなる言語をもまた、それらが理解されるようになるとすぐに信じてしまいがちなのである。子供たちの間であれほど顕著な信じやすさはここに由来する。彼らは本当だと言われるものを最初はすべて信じる。そしてまさに経験のみが、このような自然的な性癖を抑制するよう彼らに教えるのである。[トーマス・] リード博士は、彼の人間精神の独創的な探究においてこの主題を大いなる明敏さをもって論じた。⁵

[経験はどのようにして獲得されるか]

私たちが経験を獲得するのは、私たち自身の感覚の証拠によるか、あるいは、他者の証言による。

[私たちの感覚 (senses) の証拠は時に人を誤らせるものであり、時に不完全なものである]

(1) 私たちの感覚の証言は、極めて高い程度の証言の一つと一般的に見なされているが、それはしばしば人を誤らせるものであり、しばしば不完全である。私たちの感覚器官の上に作られる印象の結果として、私たちの内に喚起される感覚 (sensations) は、次のような条件に依存する。

それを通して対象と感覚器官との間の伝達が行なわれる媒体の状態に [依存する]。たとえば、私たちが目に見える対象について判断する場合の、空気の状態に [依存する]。

感覚器官そのものの状態に [依存する]。そういった器官のすべてが種々の仕方で不完全なものにされうるからである。

私たちの感覚は独力では、物体の精妙さや微細さや、余にも速い動きや余にも遅い動きや、余にもありふれた対象や、そしてまたその他の多くの原因の故に、私たちをしばしば裏切る。

印象 (impression) は健全な状態にある器官の上には正しく刻印されるのだが、そこから精神へと運ばれる諸観念は、想像力によって完全に判断力を間違った方向に導いてしまうほどに変化、変容されうる。だから自然誌のすべての部分や、他のすべてにまして医学は、目撃証人によって本当らしいと証言されているにもかかわらず、彼ら自身の想像力の中にしか決して存在を持たなかった諸々の事実で満ちているのである。

記憶の同じような誤りから、そしてまた、その役割〔記憶の場所〕を騙る想像力から、私たちの感覚によって証拠と想定されるものを私たちは信用するが、実際にはそのような証拠を私たちは一切持っていなかったのである。同じように私たちはしばしば悟性の見解もしくは推論を感覚の証拠によって確立された事実と見誤るのである。たとえば、諸対象の実際の大きさをそれらの見かけ(appearance)から判断するときがそうである。しかし、いくつかの特定の条件において、私たちの感覚が人を誤らせるもの、あるいは不完全なものであるとしても、私たちの本性の抵抗し難い本能によってそれらを信頼するように私たちは導かれるのである。あらゆる実験的知識は、以下の原則に基づいて生じる。すなわち、私たちはそのような本能なしには人生において一歩たりとも進むことはできない〔という原則である〕。私たちの感覚の誤謬や不完全さを発見するのに私たちが使用するまさにその方法そのものが、そういった感覚の証拠に従うというそのような必然性を前提としているのである。というのも、確証を求める訴えは常にこの証拠に対してなされざるを得ないからである。

(2) 私たちが信用する他者の証言に由来する経験は、私たち自身のそれと同じ不完全性を免れないし、さらにまた、私たちの作者の正確さもしくは信憑性に関する私たちの不確実性という追加の不都合をも免れない。

〔限定された経験を信じることから生じる結果〕

以上、経験のいくつかの起源について検討したので、次に人類が一致して経験を適用する仕方を考察することにしよう。すでに述べたように、人びとは、彼らがある場合に生起するのを目にしたものは、同じ条件において再び生起するだろうということ、また、同じ原因は常に同じ結果を生み出すだろうということを自然に信じる。このことは哲学者にとっても農夫にとっても等しく真実である。これら両者の唯一の相違は、次の点にある。すなわち、農夫が二つの場合を正確に同じであると結論するのは、それらがはっきりと目に見える外観において相互に似ているからである。他方、哲学者はより広い経験とより正確な観察から、そう簡単に外観を信じない。かれは欺瞞にはさまざまな種類のあることを知っており、従って判断を下そうとする前に、あらゆる微細で潜在的な条件を検討する。そしてさらに、場合と場合との正確な類似性を厳密に確認する

ことは困難だから、真の哲学者は、生起したことから生起するであろうことに関する結論を引き出す際に極度に懐疑的になる。様々な条件下で水を目にし、しかしなお水が流動性を維持しているのを目にしたアフリカ人は、流動性は水にとって本質的なものであると結論し、世界のある部分では水はしばしば固形の状態で見られると語られても旅行者の言を信じないであろう。彼の過ちは、経験を信じるところからきているのではなく、彼が実際には持っていないにもかかわらず、十分な経験を持っていたと考えるところに由来する。彼が自らの経験から正当に推論しえたのは、ただ、水は彼がそれを目にしたあらゆる条件下では流動的で有り続けるだろうということだけである。しかし、それを凝固させるに十分な程度の寒さにさらされた水というのは、彼が決して目にしたことがない条件だったのである。それ故に、彼の経験は、水が寒さにさらされるに至った時常に、その寒さがその流動物に対してどのような結果をもたらすかを彼に語ることはできなかったのである。

[類推による推論]

諸々の事実こそが、真の科学に唯一堅固な基礎を提供するのだが、私たちがそれらを他の事実と結びつかないと見なす時には、それらの事実はほんの少ししか教訓を与えない。「自然」の現象は無限である。しかし、人間の精神の諸能力、とくに記憶は、限られている。それ故に、もしこれらの現象がある種の一般原則あるいは法則に還元できなければ、個々の事実に関する私たちの経験は、ほんの少しの利益しか私たちに与えることはできないだろう。しかし精神には「次のような」強い性癖が存在する。すなわち、類推に喜びを感じ、相互に類似する事実を比較し、結びつけ、さらにこの比較によってそれら事実をある種の一般原則へと還元し、そのような一般原則を他の結果を説明するために適用したり、あるいは、他の結果を作り出すよう私たちが仕向ける「性癖である」。このような自然的性癖を利用して、こういった結合を発見し、それら結合を「『自然』の法」と呼ばれるある種の一般法則もしくは原則のもとに還元することが、真の哲学の勤めである。

[個々の事実からの帰納による一般原則の演繹]

個々の事実を一般法則に還元しようとする私たちの傾向は、何であれ一般的でない出来事の原因を発見する際に人々が示す不安 (anxiety) から明らかである。この原因の発見は、その出来事が作り出される「自然」のあの法を見つけ出すこと以上のことを暗示するものではない。「自然」に対する私たちの探究においては、観察の正確な比較と正確な整理によって私たちがいくつかの一般法則に関する知識に到達した後に、これらの法則を一緒に比較することで、いくつかの法則がさらにもっと一般的なものと分かることもあるだろう。そしてこのようにして、ゆっくりとした用心深い帰納 (induction) によって、私たちは「自然」の体系を統御している最も一般的な法則の知識にまで進みうるかもしれない。しかし多くの障害が生じて、哲学をこのような基礎の上に確立することを妨げるのである。その内のいくつかのものを説明するようにしよう。

[これらの原則を確認する際の私たちの性急さによって私たちが導かれる誤り]

(1) すべての知識をある種の一般法則に還元しようとする、またすべての出来事をある種の一般法則のせいにならねようとする人々の性急さ*が、人びとをして探究のゆっくりではあるが確実な方法に従うことを好まなくさせる。そういった法則を発見する、より短絡的なやり方を人々は試み、想像的類推からの間違った推論か、あるいは「自然」の法則を実際よりもより少なくかつより単純であると想定することによって、彼らは間違った方向に導かれる。その結果は、諸科学の不完全で間違った諸体系への性急な還元である。[* Bacon de Augmentis Scientiarum と脚注にあり。]⁶

[想像的類推からの欺瞞、哲学的な反論的態度の利点]

(2) 類推を発見する際に抱く人々の喜びは、人びとをして、実際には全く類似が存在しないか、あるいは、重要な類似が全くないところに、事物間の類似をしばしば想像せしめる。類推からの論証は、きわめて容易に生き生きした想像力に自らを委ねてしまうが、観察と実験から引き出されたより直接的でより確固とした論証には、骨の折れる注意と適用が要求される。最後には、それらの論証は、望まれていた原則を確立するには不十分だということが明らかになるとし

ても。私は類推の有用性を喜んで認めるだろう。類推は、それらの助けがなければ容易に理解されえないであろう事物の理解をしばしば促進する。同様にまさに類推からの推論によって私たちはときに多くの有用な原則や発見を予期するように導かれる。しかし、類推が導きうるものはすべて、通俗的には「理論」と呼ばれるところの蓋然的な推測（conjectures）でしかないから、より直接的な証拠を獲得することができるときには、私たちは類推に決して黙従すべきではない。

（3）科学における一般原則や、芸術・技術における有用な創案の発見と想定されるものには通常ある種の醗酵状態が伴っており、それが生きいきとした想像力を持つ人々をして彼らの行く手を妨げるあらゆる困難に対して盲目にさせたり、さらにしばしば彼らをそのような困難を除去させさえするよう仕向けるのである。お気に入りの仮説に矛盾する諸事実の隠蔽は、必ずしも常に誠実さの欠如によるものではない。その作者がそれらの事実に言及しないのは、それらの事実が彼に見えていないからということもあるし、彼がそれらを軽視している場合もある。また、重要な発見だと彼が考えるものに対する悪感情（prejudice）を作り出すという恐れからそれらの事実を隠蔽する場合もある。しかしながら、真の哲学者なら誰でも、この点に関して特に自分自身に対する反論者となるだろうし、理論らしきものを目にすればいつでも、それが真なのか偽なのかを決める直接的証拠を生み出しうるあらゆる実験を考案するために、直ちに自らの発明の才を彼は働かせるだろう。

このような哲学的な「自分自身に対する」反論的態度（dissidence）は、人のやる気をなくさせるものどころか、[却って] 諸原因と一般法則の探究を大いに推進するのである。未決状態（state of suspense）は常に不愉快なものである。そしてそれが与える不安は、それを取り除くかもしれないさらなる探究の強力な刺激となる。理論に対する熱狂的な愛着は、危険な誤りに導くだけでなく、人びとに偽りの安心感を抱かせることによって、さらなる探究のあらゆる動機を遮断してしまう。それは真の哲学的懷疑主義でもなければ、「自然」の諸法則への探究のスピリットを抑圧する、私たちの現在の知識に対する低評価でもなく、結果的に才能あるものの熱誠（ardour）を冷え込ませ、進歩に対する遠大で壮大なあらゆる見解を萎えさせる、人間の諸々の力に対する卑しい評価なのである。

心情に訴えた作品の中には、真理の探究においてあれほど不可欠なあの冷静さと厳しい厳密さの場所がなく、想像力がもっとも純粋な形で存在し、もっとも奔放な、もっとも野放図な類推すらもがしばしば適切なものとして許されることもある。確かに哲学者であっても、自らの見識あるいは理解力を疑問視するという譲歩を全くせずに、大いなる喜びをもっておとぎ話を読むかもしれないが、しかし、もし彼が、それが絵空事（romance）であり、自らがその作品の精神（spirit）あるいは優雅さに魅了されているにすぎないことを自覚せず、それと同じ喜びをもって、実験や観察にではなく、生き生きとした想像力の気まぐれにもとづく哲学的探究を行うのであれば、そのおとぎ話は彼の見識と理解力の両方に甚大な影響を与える。

〔推論と一般原則の確立の、とりわけ医学における必要性〕

（４）この種の事柄には特別の注意に値する一種の自己欺瞞（self-deceit）が存在する。おそらくはそのことに気付かずに、自分たち自身が理論中毒で知られたかの人々が、哲学における理論や仮説を激しく非難するのを私たちはしばしば発見する。このことは医学の著者たちに関して顕著である。彼らは一般に、医学において自分たちのものと異なるあらゆる推論や原則をくだらない（idle）理論として非難し、原因や原則に関するあらゆる推論や探究を無益で人を誤らせるものと糾弾しているように思わせる仕方で理論を繰り返し論難する。しかし、私たちは推論なしには知識の追求において一歩たりとも前に進めないということが考慮されるべきである。すべての有用な実験において、特に一連の実験を行う際には、私たちは自分の理性を使用せざるを得ないし、そこには、ある原則についてのある種の予想が確認されるべきか拒絶されるべきなのかを考慮すべき時点が存在するはずであり、そして理性は、真理の発見を目指す、あらゆる観察あるいはあらゆる実験をなす際に留意すべきすべての条件を決定しなければならない。推論なしに、すなわち、確立されたあるいはほぼ間違いないとされたある種の原則に対する信頼なしには、私たちは決して経験から利益を得ることはできないだろう。というのは、[そのようなものがなければ] 私たちはその経験を私たちが既に目にした事例から今まさに目の前にある事例に移すことが決してできないだろうからである。例えば、私に間欠的に熱を出す患者がいて、その熱を「バーク（Bark）」⁷で治療すると提案するとしよう。私は以前この薬で500人の患者を治療したのだが、

しかし、年齢や体質やその他の特徴の点で、私の患者の条件に正確に一致した体調を持った患者を決して治療したことのないことを私が知っているとは仮定しよう。従って、もしこの薬を私が与えるとするならば、次のような原則、すなわち、「バーク」はある種の条件間の差異にかかわらず、普遍的にこの疾患を治療するだろうという原則に基づいて推理するに違いない。しかしこの原則は、私がそれについて直接的かつ決定的な知識を持つものではなく、類推からの蓋然的な推論によって採用するに至った原則である。そして実際、それは普遍的に真であるわけではない。むしろ医師たちは、彼らの医療行為（practice）において、将来の観察がそれに対する例外を確認するまでその原則に基づいて処置せざるを得ないけれども。ブールハーフェ（Boerhaave）、ホフマン（Hoffman）、シュタール（Stahl）、そして他の体系的な著者たちは、互いの理論を念頭に置きながら、それらに対して激しく抗議している。⁸ というのも、それらの理論の各々が、異なった仕方で、そしてまたしばしば対立する仕方ではあるにせよ、彼らの取り扱うあらゆる疾患の直近の原因および彼らが処方するあらゆる治療薬の作用の仕方をあまりに仮説的な原則に基づいて説明しているからである。純粹に実践的な著者だとの評判だったシデナム（Sydenham）ですら、仮説的な推論で満ちてはいるが、しかしながらその推論は、彼をして観察への注意を弱めさせるような通常の結果を伴わなかった。⁹ そして実際、彼の仮説は、それらは彼の医療行為に全く影響しなかったか、あるいは、それらが彼の経験に服従しようとしなければいつでも容易にそれらを放棄できたほど、彼にとってあまりに拘束力のないものだったように思われる。

一般的に見れば、すべての医師が推論しているに違いないと思われる。彼らの間での唯一の相違は、ある人々は他の人々よりもうまく推論する点に存する。例えば、疾患の原因や、治療薬の効果を研究する医師たちがいるとしよう。その探究の困難さや、彼らが欺かれるかもしれない種々様々な仕方を強く自覚して、彼らはその主題に関係するあらゆる事実を集め、整理する。ある主要な原則を遠くに捉えた時、彼らは実験によってその存在の直接的で決定的な証拠を手に入れようとする。その証拠がその存在に不利になると明らかになれば、彼らは自らの誤りを目にすることになり、率直にそれを認める。もし状況が直接的な証拠を許さないのであれば、彼らは自らの原則を多かれ少なかれ蓋然的なものとししか見なさないが、しかし決してその追求を断念しない。こういう人々こそが、「合理的な医師（rational physicians）」の肩書きを正当に要求する権

利を有すると私は考える。他方で、若干の事実と漠然とした類推に基づいて、仮説的な原則を作り出す医師たちがいる。資料がかけていると思われる場合には、創作的な想像力がそれらを供給する。彼らは自らの創意工夫の才能を諸々の事実を仮説的原則に符合するように歪め、そしてまた彼らの目的に服従しようとししない事実を、間違っただけのものあるいは信じられないものであるとの口実の下に拒絶する。実践においては、彼らの一般原則はいかなる確証も必要ないほど十分に確立されたものであると考えるので、彼らは個々の観察を無視する。そのような人々が、「合理的な医師」の肩書を騙る。しかし間違いなく、自らを合理主義者の一員に分類してきたあらゆる体系構築者は、この肩書きを要求する権利を持つことはできない。彼らの体系の多くが[互いに]異なり、矛盾しているからである。

〔経験派 (Empirics) と理論派 (dogmatists) との間の論争の状態〕

経験派 (empirics) の創設者セラピオン (Serapion) の時代から現在に至るまで、常に二つのセクトへの医師たちの区別が存在した。¹⁰ 一つは、観察と経験に対するきわめて厳密な配慮を要求するものだが、彼らの対立者たちによって偽医師 (quacks) との烙印を押された。もう一つは合理的あるいは理論的な (dogmatical) 医師の名前を騙るものであるが、経験の軽蔑者であるとか、想像的仮説に固執し、実践には全く適用できないとか、誤謬によってそれを駄目にしてしまうと非難された。このような区別は私には、医学の利益を本質的に傷つけてきたと見える。その争いの本質について正しい理解を持ちえない多くの学生は自らをどちらかの陣営に分類しがちなもので、その争いの本 (もと) を明らかにして、この主題に関して人びとがどれほどまでに言葉の曖昧さのために欺かれ、混乱させられてきたかを示そうと思う。しかしこの論争が存在する以前の医学の状態の概説を前もって述べておくのが適切だろう。

ヒポクラテスの時代以前には正規の医学体系の痕跡はまったく存在しない。彼の時代までは医療実践 (practice) はただ経験的なものでしかなかったように思われる。すなわち、個々の疾患における治療薬の効果についての実際の経験もしくは想像上の経験に基づいているが、しかし、それらの疾患の徴候あるいは原因を適切に考慮したものではなかったように思われる。さらにその医療実践は、私たちがエジプトで手にしているそれに関するもっとも初期の記述から明らかな

ように、僧侶たちに限定されていた（こういうことはきわめて古い国々においては一般的なことであったが）。僧侶たちはそれを秘儀（mystery）として秘密にし、自分たちの宗教的迷信にそれを組み込み、大仰にそれを執り行った。ギリシャでは長い年月の間、特定の家族、すなわち、アエスクラピウス（Aesculapius）の末裔たちに限定されていたことにより、その科学から別の様々な不都合が生じた。¹¹

この家系に属さず、医学を自然哲学の有用な一分野として研究し始めた哲学者たちが、医学に観察と推論というより拡大された精神を導入した最初の人々だったのは明白である。こういう人々の中でもっとも際立っていたのがピタゴラスだった。彼は天才的な洞察力をもって、自然のあらゆる分野を束縛されることのない好奇心をもって探究した。彼の生き生きとした想像力は、彼をして霊（genii）や魔術や、さらに彼の哲学のすべてを、そしてその結果としてその哲学に結び付けられた彼の医学（physic）をも特色づけている、数の幻想的な調和と力に対する信仰へと導いた。後に続いた哲学者たちは、そのあらゆる分野をきわめて荒唐無稽な仮説によって歪めることで、さらにそれを損なってしまった。

このような条件の中で医学はヒポクラテスによって発見された。彼の賢明な知恵が彼にこれらの悪癖を正すことの必要性を明らかにした。そして彼はその技を改造し、それを観察という確実な基礎の上に置き始めた。ここから彼は医学の研究を哲学のそれから区別した最初の人だと言われる。しかし、同様に彼は個々の観察から一般的な原則を確定しようと努めたから、合理的あるいは理論的体系の父とも見なされている。けれども当時支配的だった哲学の一部やさらには当時の迷信の一部さえいまだ彼に付着していたことは、彼の著作から明らかである。しかし全体として見れば、解剖学や医学と結びついた他の諸学の当時の低レベルの状態を考慮すれば、彼の推論は期待されうる以上にまともなものである。ヒポクラテス以降の何世紀かの間に、医学はいかなる進歩もしなかったように見える。古代の偉人たちのうちの二人、すなわち、プラトンとアリストテレスは、異なった仕方ではあるが、その時代だけでなく、ほとんど私たちの時代に至るまで、共にその改善を妨げた。

プラトンの著作は最も純粋なアッティカの優美さにおいて際立っているから、彼は今後も常に文学の父の一人と見なされるだろう。しかし、彼を自然哲学者とみると、彼はそのほとんどあら

ゆる分野、とりわけ医学を墮落させたものとみなされなければならない。『ティマイオス』の中で、彼は動物の生体システム（animal oeconomy）に関する自らの見解の一例を与えているが、それらは単に興奮した想像力の発露に過ぎない。創造の全体を把握しようと試みた彼の才能の崇高さと彼の抗いがたい雄弁の才は、彼に続く判断力に勝る想像力をもったすべての哲学者たちを魅了し、「観想（Contemplation）」というもっともらしい名の下に彼らの注意を「自然」の研究から逸脱させた。その結果、彼のきわめて野放図な神学的観念の多くが、神学の諸体系だけでなく私たちの医学の諸体系にも導入されることになった。

アリストテレスはきわめて明敏できわめて包括的な天賦の才を持っていた。彼の著作が、知識の多くの分野において、推論の独創性と健全性の故にきわめて高く評価されているのも当然である。しかし私はただ彼の作品の中で自然哲学と医学に関するものについてのみ語ることにする。彼は医学について専門的に論じていないにもかかわらず、この哲学者の著作は、いかなる医師の著作にもまして医学に広範な影響を与えた。彼の哲学的原則はプラトンのそれに類似して、仮説的で幻想的であるが、より以上にもっともらしい議論によって支えられ、「自然」に関するより広範囲な知識に基づいていた。彼の諸原則はガレノスによって採用されたから、医学のほとんどすべての体系は、前世紀の諸体系に至るまで、多かれ少なかれそれらの原則から引き出された。しかしアリストテレスが医学に与えた害は、彼が間違った原則をそれに導入したことから生じたのではない。というのは、このような誤用は時間の経過とともに発見されたに違いないからである。[そうではなくて] そのような害は、彼が哲学的探究の真の精神を損なったことから生じたのである。人びとに明晰かつ正確に推論することを教えるという口実の下、アリストテレス、というよりはむしろ彼の後継者たちである教師たちが、経験と観察から[人々の] 注意を逸脱させ、それを無益な微細な区別の追求に没頭させることで、有益な知識の進歩を止めたのである。[そのような追求は]「自然」の奥底まで解明すると公言しておきながら、その実単なる無益なたわごと（jargon）に終始した [からである]。

プラトンとアリストテレスの、そして時間とともに忘却の中に埋もれてしまった他の人々の学説の種々様々な変容は、医学を多くのばかげたことと混同し、医学とは全く関係のない論争に巻き込んだ。医学がセラピオンに再発見されたのはこのような状況下であった。彼はこのような哲

学が医学の技術とは異質のものであることを主張し、医学の実践を経験のみに限定した。彼は疾患の明白なもの以外の原因の探究を不必要だと考えたから、解剖学、病体の解剖、そして疾患の遠くの原因や隠れた原因へのすべての探究を退けた。そのような振る舞いが、今日の医学的知識の発達した状態にある私たちにとってどんなにばかげたものに見えようとも、当時それは理に適ったものだった。その時代医師たちは解剖学や生理学や化学だけでなく、彼らの職業に結び付く自然哲学のあらゆる分野に関して無知だった。もし彼らがこういった事柄における自らの無知に気付いていたなら、彼らの推論は不完全ではあったかもしれないが、正道を外れるものにはならなかったであろう。なぜなら彼らがそれに基づいて前進することのできる事実が彼らに欠ける時には常に「そこで」彼らの推論は止まっただろうからである。しかしこのようなことはいつの時代においても、哲学者たちや医師たちのやり方ではなかった。観察が欠けるところでは常に空想（fancy）がその場所を埋め合わせたから、少しの間いかなる仮説をも確立するための材料に事欠くことはなかった。古代の医学的哲学の見本としてプラトンに由来する次のような学説に言及しておこう。

物質の基本的な粒子が受け入れる最初の形は、三角形だと信じられていた。これらの三角形の様々な大きさと様々な位置から、四つの元素、すなわち、火と空気と水と土が作られた。熱は次のように説明された。火が過剰であれば、持続的で燃えるような熱が作られる。空気が過剰であれば、熱は一日おきに起こる。水が過剰であれば、二日目ごとに起こり、土が過剰であれば、三日目ごとに起こる、と。これらの疾患の治療法は、今まさに言及された（そして多くの点で完全にばかげたものとして言及されたのだが）直近の原因に対応するとの想定で定められた。非常に開明的な国で、最も顕著な才能に恵まれた人々にあって、人間の理解力がこのようなキメラ（chimeras）を真理として信奉するほどに弱いものでありえたということを知ることは、謙遜の戒めとなる。¹²

セラピオンは古代人の中に、才能に優れた、「経験派の人々（Empirics）」という名称で区別された幾人かの追随者を持っていたが、しかし、学識あるいは天賦の才に自惚れている近代人の間では、公然と自分がこの派に属するなど名乗る人はきわめて少なく、今では「Empiric」という名称は非難の言葉として使用され、無学な偽医者にしか適用されないほどである。しかし、正

規の教育を受けたすべての医師は「Empiric」の名称を拒否するとしても、実際には、empirics [経験派の人々] と dogmatists [理論派の人々] との間の古い区別は、見方を変えれば、現在に至るまで続いているのである。しかし、両方の派閥とも、彼らの医師としての振る舞いの点だけでなく、彼らが論争を続けてきた際の散漫な仕方においても非難されるべきであったと私には見える。このことを証明するために、私はしばしばこの論争に現れ、それらの曖昧さがその論争を永続させているいくつかの言葉の意味を定めるように努めよう。

本来「empiric」という語は、経験を尊重し、その実践において経験によって導かれる医師のことを指す。この意味で、empiric であることは称賛に値することである。経験こそは医学のあらゆる知識の基礎である。最終的な訴えは経験に対してなされなければならない、どのような主張も経験もしくは事実と矛盾すれば、間違いだとして拒絶されるべきである。しかしながら、「Empiric」という呼称は一般的に、ある疾患のある症例におけるある治療薬の結果の観察から、その種の病気（distemper）の種々様々なすべての症例にその治療薬を適用する医師に対して用いられる。¹³ しかし諸々の疾患に与えられる名前は、実際には一定の数の徴候に対して付されるものであり、その数が3ないし4を超えることはまれである。そうすると同一の名前が、これらの兆候が生じるすべての症例に与えられることになる。あるいは、言い方を変えると、これらの症例は、他の多くの点においてまったく異なり、異なった処置を要求するにもかかわらず、同一の種類の疾患に帰属させられることになる。こうして small-pox の類（genus）の下に、rheumatism による肺の炎症よりもより以上に互いに異なるいくつかの種（species）が含まれることになる。それだから、small-pox のあらゆる症例は、[それらに] その名前 [すなわち、small-pox という名前] を与える若干の兆候においては一致するかもしれないが、より重大な他の兆候に関しては異なりうるのだから、そのあらゆる症例にとっても、いやそれどころか、他のいかなる疾患にとっても普遍的な薬など存在しえないのである。ある疾患におけるある治療薬の適用は、同様にその疾患を作り出している様々な遠い原因や直近の原因によって調整されなければならない。例えば、患者の体質や、彼の年齢や慣習や、時節や気候や他の条件によって。¹⁴

これらの真実は、医学に全く通じていないあらゆる人には非常によく知られているし、また当然常識にとっても非常に明白だと想像されるから、誰であれ、どの疾患に対しても普遍的な一つ

の特定の薬（specific）を推奨するほどどうして無知あるいは破廉恥になりうるのか驚くし、また誰であれ、きわめて理解力の低い人ですら、ほんのわずかであれどうしてそのような主張に信を置くのかにも驚く。

私が〔以上において〕述べたことから明らかなのは、empirics は経験しか信頼しないと言い張っているにもかかわらず、実際にはそれを放棄していたということである。

どんなに広範囲であろうとも、医師をより賢明に、あるいは彼の医療実践においてより上首尾にさせない経験が実際存在する。それは、その経験に必要な観察が伴っていないからである。疾患の治療にあたって、ある種の原則の不可謬性やそれらの原則から帰結する治療薬の不可謬性に対する確信を持って始める医師もいる。彼らは疾患の名前を決定するや否やこれらの原則を必ず適用する。彼らは、自らの治療がうまくいった症例とうまくいかなかった症例との間でなされるべき区別に注意を払わない。彼らは決して自らの医療実践を変更しないし、またいかなる改善の提案にも耳を貸さないから、その結果、どのような新しい発見からも利益を得ることができない。

医学の状態と農業の状態はこの点で似ていた。最近の30年の間に、それに先立つ多くの世紀におけるよりも、より多くの実際的知識がこれら二つの科学において獲得され、より多くの事実が確認された。一方で、それら科学の原則の内の多くの原則の不確実性や、さらには誤謬さえもが証明された。それでもなお、為された事は主として、医師と農夫たちに、彼らが経験だとされてきたものにおいてこれまでどんなに欺かれてきたかということを示すのに役立つし、また彼らのいくつかの職業の範囲の大きさと困難さについて彼らに何らかの観念を与えることにも役立つのである。

あらゆる時代において経験派の人々（empirics）が振る舞ってきたやり方から見て、彼らの著作がその技術〔医学〕の進歩にほとんど貢献せず、逆に、その技術をあれほども長い間苦しめてきた多くの虚偽によってその技術を、特に、薬の効果にかかわるあの重要な分野を妨げることに大いに寄与したことは驚くにあたらない。私が言及したような経験派の本は、その職業〔医学〕に向くよう教育されず、医学の実践的部分に関するある種の知識を得ようとのみ望んでいる人々には役立つだろうと言い張られてきた。しかし、これは真相とは全く異なり、こういう人々だけが、そのような本が危険でありうる人々なのである。実際的な知識と実践の経験のある医師な

ら、不完全な仕方に関係づけられた事実（それらは役に立たないこともあるだろうし、このような利点〔実際の知識や実践の経験〕を持たない他の人々を間違った方向に導くこともあるだろう）から、教訓を引き出すとか、あるいは手がかりを得るとかするかもしれない。そのような人〔医師〕にとっては、治療薬の投薬にかかわるすべての条件が、あまりにも明確に特定されうることなど決してない。ある治療薬の場合の一例を挙げることにしよう。その治療薬は頭痛の治療においてほとんど不可謬であると推奨されていると仮定しよう。ここでどれだけ多くの疑問が生じるだろうか。その治療薬はどの種類の頭痛に有用だと認められているのか。苦痛は頭そのものの内部の障害 (affection) に由来したのか。うっ血状態に起因したのか。水の滞留からきたのか。脳の炎症あるいは脳の膜の炎症に由来したのか。あるいは、栄養管 (alimentary canal) の異常から生じたのか。酸過剰 (acidity) からきたのか。何らかの腐敗物質に起因したのか、あるいは胃の中の粘度の高い粘膜の滞留からきたのか。頭痛には熱が伴っていたか。〔もしそうなら〕どのような熱だったか。それは冷たいものあるいは熱いものに突然曝された結果だったのか。あるいは泥酔の結果だったのか、傷の結果だったのか、あるいはほかの外的な暴力の結果だったのか。あるいは何らかの精神の強い感情の動きからだったのか。この事例では他の種々異なった疑問も当然提出されるだろう。そして、こういった疑問に明確に答えられなければ、その医療実践は不完全である。ある種の頭痛の多くの場合において、その治療薬は成功するという見込みをもって適用できないだろうし、他の場合には、その適用は危険性を伴うかもしれないだろう。人類にとって幸いなことに、特定の疾患における「特効薬 (Specifics)」の名前で世に知られてきた医薬品の大部分が、それらが投与される服用量において極めて僅かであるかあるいは少なくとも極めて少量なので、いかなる場合においても安全に与えられるだろうということである。

〔以上において〕医学が「経験論者たち」の労苦からどれほど僅かな利益しか得てこなかったかを示すことを試みたので、〔今度は〕「正規の (Regular)」、「合理的な (Rational)」あるいは「理論的な (Dogmatic)」医師という名前を騙るその反対派によって医学の利益がどこまで前進させられたかを探求することにしよう。¹⁵

「dogmatic」という語は、その元々の意味では、疾患についての彼の知識をある種の原則に何とか還元しようとした医師だけを含意した。後になって、その語は、精神的な弱さと虚栄心から、

あらゆる疾患の直近の原因とあらゆる治療薬の作用の仕方に関する知識から医療行為をしていると見せかけようとする医師たちによって採用されるにいたった。しかし今では「Dogmatical」という語は、通常の使い方では一般的に好ましくない意味で使用され、自惚れて尊大でそしてまた意固地になって特定の見解に固執している医師に対して適用される。

合理的で（rational）理論的な（dogmatical）医師たちの特徴を呈している人たちに対する不満があまりに執拗であまりに頻繁なので、それらの不満は全く根拠なしとはできない。彼らは観察をないがしろにするとか、医学の有用で実部分的な部分に注意を向けないとか、彼らの職業の主要な目的とは無関係な探究に精神を没頭させているとか、間違った推論とちゃんと基礎づけされていない仮説によって医学のすべての分野を台無しにしているとか、そしてまた、彼らの空想的な体系を支えるために、事実を偽り、覆い隠し、捏造さえすると非難されてきた。残念ながらすべての時代における医学の歴史はこういった非難を十分正当化すると言わざるを得ない。しかし同時に、それらの非難が誇張されてきたことも認めなければならない。すべての仮説や理論に毒づくだけでは満足しないある人々は、医学におけるすべての推論に対して、明らかに私たちを間違った方向に導くにいたると激しく抗議する。しかしここでは私たちは、これらの不満において使用されているいくつかの用語の意味を確認するよう努めなければならない。

本来推論とは、精神がそれによってある事柄から他の事柄を導き出す、もしくは前提から結論を演繹する、精神のあの力の行使を意味する。この力の行使がなければ私たちは、特定の場合に本能や想像力や情念によって駆りたてられる時を除いて、通常の生活の諸事において行動することができないだろうし、また真理の探究において自明な（self-evident）原則を超えて前進することもできないだろう。そうすると私たちは私たちの本性の必要から推論しなければならないのだから、私たちの勤めは、私たちが正しく推論することに配慮することだけである。しかし間違った推論は、医学では法律や神学や生活の通常の行動におけると同程度に一般的である。けれどもこういったいずれの対象においても私たちの理性の使用を放棄すべきなどとかつてだれもほめかしたものなどなかった。

医学における理論に対する主な反対は、言葉の曖昧さに由来する。ある一つの科学の理論とは本来その科学に関して一般的に確立された諸原則の学説であり、そういった原則を生活の用途に

適用する実践的な技術からは区別される。だから例えば、航海術の理論は、仮説的な諸原則から成り立っているのではなく、堅固で疑問の余地がない土台の上に確立された諸原則から成り立っていて、それらの諸原則の適切で柔軟な適用である航海術の実践とははっきり区別される。[航海術の実践は] 習慣と経験からのみ獲得されうる技術である。医学の理論と実践との間にも同様の区別が当然あるべきである。しかし、言葉の誤用により、ある人々によって医学の理論は実際には単なる推測とキメラ的な憶測から成り立つ偽りの科学と表現される。このような正しくない表現の結果（以前私はこれを反駁しようと努めたのだが）、医学の理論と実践との間に不幸な対立が確定されてしまった。あたかもそれらは本質的に結合されないだけでなく、相対立するものでさえあるかのように。一方はまったくの想像力の産物で、他方は明敏な観察と経験の結果であるかのように。ところが実際には理論はその言葉の本来の意味において実践によって作り出されるものであり、事実のみに基づき、絶えずその真理のために事実に訴えるものである。同様に医学の諸々の仮説に対して多くの人々が抱いている偏見は、その語の曖昧な意味に基づいている。仮説は一般に理論と混同されるが、仮説とは本来[次のような] ある原則の仮定を意味する。[すなわち] その実在については経験に由来する証拠が存在せず、そうではなくて、その実在を推測するには不十分な数の、また十全でもない事実によって多かれ少なかれ蓋然的なものとされるだろう原則である。そのような仮説が、単なる仮定あるいは推測に相応しい非常に控えめな慎重深い仕方で提示される時には、それらは無害であるだけでなく、正しい理論を医学において確立する上で不可欠ですらある。それらは諸原則の最初の萌芽あるいは予期である。これらの仮説なしには、有用な観察も、実験も、整理も存在しえないだろう。というのも、精神の中にそれらを形成しようとする動機も原理も存在しないだろうからである。だから仮説が危険で非難すべきものになるのは、それら仮説が正しい原則として私たちに押し付けられるときだけである。なぜならそのような場合には、おそらく根拠がしっかりしている場合もそうでない場合もあるような諸原則におとなしく従うよう精神を導くことによって、それらはさらなる探究を止めてしまうからである。このようにしてそれらは私たちの科学において大いなる災いとなってきたのである。ところで、正規の教育と医学を体系的なプランに基づき研究することの主要な長所の一つは、それによって学生たちが本物の事実と、本物の事実と勘違いされた精神の推論（inferences）とを、また

空想的仮説と正しい理論とをより区別できるようになることから生じる。

-
- 1 底本は、*The Works of the late John Gregory*, M. D. 4 Volumes (1788年). 中のVolume 3: *Lectures on the Duties and Qualifications of a Physician* (1770年, pp.117-172.)である。本文確認のために、次の文献も参照した。Laurence B. McCullough (ed.), *John Gregory's Writings on Medical Ethics and Philosophy of Medicine*, Kluwer Academic Publishers, Dordrecht, 1998. 本文中のイタリックの箇所は、「 」でくくった。ただし、大文字で始まる言葉も「 」でくくった。底本とMcCulloughの本文との相違については、重大だと思えるもの以外はいちいち指摘しない。関係代名詞や分詞構文によって一つの文章が長く続く場合には、読みやすさを考え一部の文章を（ ）に中に入れ、挿入句のように処理したものもある。
 - 2 Francis Bacon(1561-1626)、Robert Boyle(1627-1691)、Isaac Newton(1642-1727)。
 - 3 *の付いた原注は、*を付けた上で、文中に組み入れた。
 - 4 この箇所は、底本ではなく、McCulloughのテキストに従う。底本では、and that, in cases, similar the same events…となっているが、本来similarの前にあるコンマはその後に来るべきものと判断される。従ってここはマッカロウの本文に従い、and that , in cases similar, the same events…と読む。
 - 5 Thomas Reid (1710-1796)はジョン・グレゴリーの年上の従兄で、いわゆるコモンセンスの哲学の創始者である。彼は、1764年、ここで言及されている著作、すなわち、*Inquiry into the Human Mind on the Principles of Common Sense*を出版している。
 - 6 1623年に出版されたFrancis Baconの*De Dignitate & Augmentis Scientiarum Libri IX*のこと。この本は1605年に出版されたベーコンの英語による哲学的名著である『学問の進歩』（正確な本のタイトルは、*Of the Proficiency and Advancement of Learning*。）の内容の増補ラテン語版。意味は直訳すると『諸学の価値と発展9巻』となる。
 - 7 多分cinchona barkのことだと思われる。
 - 8 Hermann Boerhaave (1668-1738)、オランダのライデン大学の医学、植物学、化学の教授。近代臨床医学教授法の創設者とされ、弟子を通じてエディンバラ大学などに大きな影響を与えた。Friedrich Hoffmann (1660-1742)、ドイツのハレ大学教授。生理的病理的現象の機械論的説明を行う。Georg Ernst Stahl (1659-1734)、ドイツのハレ大学の医学・生理学の教授。燃素（フロギストン）説で知られる。生命現象の唯物論的・機械論的説明に異を唱えた。上記ホフマンとはライバル関係にあった。
 - 9 Thomas Sydenham(1624-1689)、英国の医師で、ヒポクラテスに傾倒し、臨床的観察と経験を重んじ、イギリスのヒポクラテスと呼ばれ、熱病の臨床科学に貢献した。
 - 10 AlexandriaのSerapionことで、最盛期が紀元前3世紀の終わりとされ、指導的な経験派の医師としてCosのPhilinusの跡を継いだ。以上、Simon Hornblower and Anthony Spawforth ed., *The Classical Dictionary*, 3rd ed. Oxford University Press, 1996.を参照。
 - 11 Aesculapiusは、アポロンとニンフCoronisの息子。彼の医学に関する偉大なる知識の故に彼は死後神格化されたとされる。以上、Lewis and Short ed., *A Latin Dictionary*, 1879.を参照。
 - 12 ラテン語でキマエラChimaera、ギリシャ語でキマイラ (Chimaira)、前部がライオン、後部がドラゴン（あるいは蛇）、中央部が山羊の神話上の怪物。

- 13 以上の議論では、小文字で始まるempiricと大文字で始まるEmpiricを使い分けている。ジョン・グレゴリーの同時代に編纂された有名なジョンソンの辞書では、形容詞のempirical、empirickともに名詞のempiricに由来し、1. 実験経験豊かな、2. 経験によってのみ知られている。合理的な根拠なくただ決まりきったやり方でのみ実践される、と説明されている。empiricは、trierまたはexperimenterとし、医療行為の正式な教育を受けず、あるいは、その真の知識を持たず、伝聞や観察のみに基づいて一か八かやる人々と説明されている。
- 14 以上の本文の説明には、現代の医学における説明とはずいぶんと異なる部分があるので、ここでジョンソンの辞書を手掛かりに、若干の解説を付け加えておきたい。この箇所に出てくるdistemperとはdisとtemperの合成語で、後者はもともと対立する質のあるべき混合状態を意味する（そこから体質や気質という意味になる）から、distemperとは、そのような混合状態の欠如状態、あるいは対立する質のバランスが崩れることを意味する。体液説からすれば、ある種の体液が病的に優越することを意味するから、結果として病気一般[ジョンソンによれば、もともとは軽い病気を意味した]を意味する言葉となる。すなわち、diseaseあるいはmaladyである。Small-pox[or smallpox]は、極度に悪性の発疹性のdistemperと説明されている。Rheumatismは、刺すようなひりひりする体液に由来すると想定される苦痛を伴うdistemperと説明されている。ジョンソンの少し長い説明を訳しておく、「rheumatismとは、筋肉の主に共通膜を襲うdistemperで、共通膜をこわばらせ、運動に適さないものとする。そしてそれは、関節部における粘液を分泌する腺がgout [痛風]の際にこわばり、じゅりじゅりする場合とほとんど同じ原因によって引き起こされるように思われる。」Shorter Oxford English Dictionary (6th edition,2007) では、「関節部及び接合組織における炎症と苦痛が顕著な特徴である疾患で、リウマチ性の発熱、関節炎、痛風を含む」と説明されている。
- 15 dogmaticalという語は、本文の以下の説明からも窺われるように（そしてまたジョンソンの辞書からも分かるように）、独断的とか権威主義的とも当然訳することができる。